

からゆきさん

森崎和江



からゆきさん 森崎和江

森崎和江もりさきかずえ

一九二七年、朝鮮慶尚北道

大邱府に生まれる。

著書——「さわやかな欠如」

「かりうどの朝」(以上詩

集)。「まっくら」「第三の

性」「奈落の神々」他。

からゆきさん 著者森崎和江

昭和五一年五月一五日 第一刷
昭和五一年七月三〇日 第二刷

発行者角田秀雄 発行所朝日新

聞社 東京・名古屋
大阪・北九州 東京都千代田区

有楽町二―六一― 郵便番号 100

電話〇三(212)〇一三一 振替東京

一七三〇 凸版印刷 青柳製本

装釘插画司修

定価七八〇円

からゆきさん 目次

ふるさとを出る娘たち

玄界灘を越えて 3

密航婦たち 17

ふるさとの血汐 37

国の夜あけと村びと

おろしや女郎衆 61

シベリヤゆき 72

異人の子と上海 86

鎖の海

唐天竺をゆく 99

海をわたる吉原

112

戦場の群れ

119

慟哭の土

おキミと朝鮮鉄道

135

大連悲歌

153

荒野の風

165

おくにことば

おヨシと日の丸

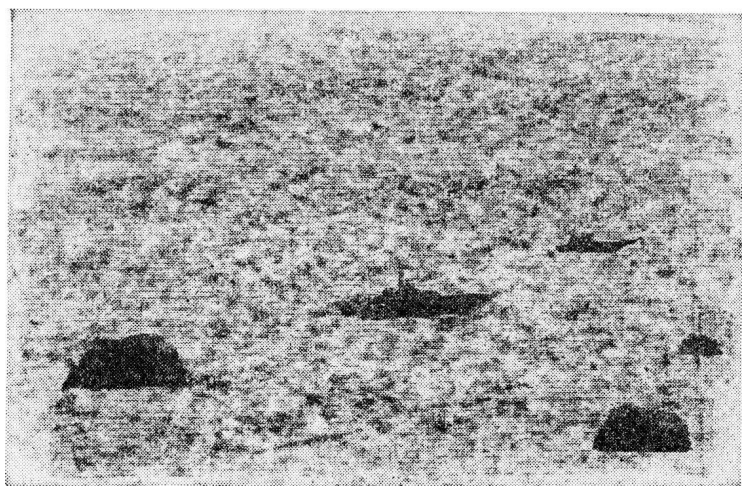
177

天草灘

210

余韻

ふるさとを出る娘たち



玄界灘を越えて

二十年ほどむかしのこと、おキミさんは木立ちにかこまれた奥ふかい家に、数人の家族とともに住んでいた。昼間は、家族らは勤めに出はらうのか、しんとしていた。

わたしはおキミさんと顔をあわせることは少なく、いつも綾さんをおしてその様子をのんびりしていた。綾さんはわたしの友人、おキミさんはその母親だった。綾さんとわたしとはいつどこで知りあったのか、二人とも思いだせないのだが、たがいに結婚しても折々会っていた。そ

の家を訪れると、奥のへやに品のいい初老のおキミさんが、しずかに坐っていた。そのまえを通るとき、綾さんは、目くぼせをすると、あたかも台風の眼のなかを通りぬけるように、さりげない風情で、しかしすばやく、わたしをみちびいた。それは、おキミさんのへやの前ばかりでなく、おキミさんについてふとした話をするときですら、そうであった。

「夜叉だもの、あの人は。ああしているけれど、狂ったら、わたしはもう、とても……」。

かの女を狂わせないように、それから、主人やその妹たちにふれさせないように……。母のあの狂気……。ほんとに、つかれるわ」

なにがそこにあるのか知りようがなかったけれど、綾さんがその母を家において、気軽に外出できないようだということが、わかった。複雑な家庭のようであった。

その綾さんが、時折せつぱつまつたようにわたしを呼びだした。わたしたちがどちらも世帯をもって一、二年のころであった。街のなかであわただしく会うのだが、そのたびに、わたしの理解の範囲をこえたなにかが、かの女のからだから噴きだす。

「母がわたしをめっちゃめっちゃにしよう。わたし、死んでしまう。もう死んでるのとおなじだ。火事のようなよ、あの人……」

わたしはようやく、義理ある母と娘との問題だな、と、なっとくする。その程度にしか綾さんも話さない。いや、話したのかもしれないが、二十代のわたしは、かの女の目には、無知に

近かったにちがいない。わたしはといえば、かの女のことを、やけにべたべたとからだをすり寄せてくる人だなど、それが後味わるく、その媚態、どうにかならないものか、と思うばかりであった。

あるほのあたたかな日だった。綾さんに呼びだされて、いっしょに、とある産婦人科の扉をおした。かの女は中絶をするのだ、という。わたしはそのことを頭のなかでしか知らなかったので、しりごみしたが、それでもその表情に押しまくられて、つきそっていった。

「せんせい、この人もそのなかへいれてやってください」

わたしはあわてて扉の外へ出ようとしたが、腕をつかまれて、内診室のなかへひきずりこまれた。

「せんせい、この人にみせてやって、いんばいをみせてやってよ」

わたしは動揺した。どうしたのよ、綾さん……。わたしは救いを求めるように医者を見上げた。涙があふれてきた。

かの女の表情はかわっていた。声は、うわごとのようにになっていた。

「せんせい。女ってなんですか！ この人、女の大先生です。この人に、いんばいをみせるのよ。いんばいとはね、三代にたたるんです。産みません。あたし、いんばいの子だ。ねえ、先生、おねがい。子宮を、あたしを、引き抜いてよ。ねえ、おねがい。ねえ、おねがい……」

医者が、

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

と、わたしのそばへ来て肩をたたいた。

「どうしたんでしょう……」

「だいじょうぶです」

かの女は、夢うつつで泣いていた。わたしは、しらじらとしてきて、かえりたくなかったが、それでも覚めないかの女の枕もとに腰かけて待った。鉄のベッド。窓。それしか記憶にない。わたしはこの人もまた女なのだと、自分に感じとれるかぎりの、想像が及ぶかぎりの、女というものを、女の性というものを心に浮かべながら、かの女をみていた。

わたしが幼いころから反発したり抵抗したりしてきた、女に対するたくさんの圧迫が、みんな綾さんとその母おキミさんのところに吹き寄せられているように感じられた。それでもその内側の感触がうまく感じとれない。ただそれまで、なんでもないときに、たとえばわたしなら、きょうは寒いわね、というときに、綾さんは、その胸もとをひろげて、ねえ、ほら、こんなになつて、と、わたしにさわらせたがる、そのやりきれないしぐさに、その吹き寄せられたふところのなかを感じとるばかりだった。

意識が恢復したころ、綾さんは、

「あなた、ばかねえ」

といった。

そのとき綾さんは、もうふつうの世帯もちの顔になっていた。ただ覚めきって、さみしげであつた。

「めつたに、みられやしなかったのよ、あなた。かならずあなたの参考になったのよ。

あたしが狂ったとも思ったでしょう。でも母はね、あたしと二人になると、もっともつと狂うのよ。母は、からゆきだったのよ。売られた女よ。

あなた、売られるということ、少しはわかった？ 一代ですまないことなのよ。売られた女に溜まったものは、その子の代では払いのけられそうもないわよ、どこまでいっても。あたし、わからないの。売られなかった女というものが少しもわからないの。

……あたし、あなたのようにになりたいのよ。あなたはねえ、あたしの、あたしのかわりに生きている、もう一人のあたしよ……」

ほほに涙をつたわせたままわたしをみて、そのふところへわたしの手をみちびきいれた。ふしぎと、いつもの媚態がなく、そのしぐさは自然だった。わたしはきごちなく、当惑していた。

湯呑みを片づけ、病院を出た。夫のもとへもどって、そのまま忘れた。病院の名も忘れた。

綾さんの母親、実は養母であるおキミさんについて聞かされたのは、それからしばらくのちのことであった。わたしは、からゆきとは、売られた女の娼楼での呼び名だと思ったまま、久しく思いだしもなかった。

おキミは天草の牛深に生まれて、幼いころ養女に出された。五つか六つのころであったという。養父は浅草で居合抜きをして投銭を得ていた人であった。おキミが養女になったころは「因業小屋」という呼び名の小さな興行をしていた。心中とか辻切りとか、蛇娘などを見世物とするのである。

おキミは明治二十九年の生まれなので、この見世物は三十年代のことになる。おキミはここに十六になるまでいた。ろくろ首など、いろいろなことをさせられたが、心に残っているのは、小屋に売られてくる病人の姿であった。

病んでいるので動きのある見世物はできない。死人の見世物は小屋の呼びものでもあった。売られてきた病人たちは、一日中死体になって身動きしないまま人目にさらされた。午前と午後には休み時間があった。その時間になるとやっと身を起こして自分のおしめをとりかえていた病人たちが、おキミには、忘れがたいのである。

その当時は、おキミやこの病人たちのように、養子とか養女とかいう名目で芸人として、あるいは娼妓として売られる者はいくらもいた。それは明治になるまえからの風習であった。売られる、ということばは、日々人の口にのぼっていたが、それは口べらしにされるといふほどの意味あいであった。売られた者もまたそのおかげで、どこかで食べてゆけた。養子や養女を幾人もかかえて、「因業小屋」は成り立っていた。そして、娼楼も。

おキミはこの小屋から、また養女に出された。明治末年、十六歳のときである。

おキミを養女とした人は李慶春といった。因業小屋にいた少女とふたり、おキミは李慶春につれられて小屋を出た。ゆく先は朝鮮ということであった。

おキミは「からゆき」になったのである。

唐天竺へ働きにゆくことを、おキミの郷里では、からゆきといった。ふるさとのある日本から海をわたってよそのくにへ働きにゆくのである。綾さんの実の母親の里でもそういった。どちらとも天草であった。

おキミたちは神戸まで陸路を通った。ここで少女がふえて八人となり貨物船に乗った。船員をおとうさんはつれて来て、おショウバイするようにといった。おショウバイした。おキミも。養女となったおキミには、李慶春はおとうさんであったので、おとうさんの命令にしたがつた。まえのおとうさんに養われていたときと同じように。おとうさんは食べさせてくれた。お

ショウバイのあとで。

門司に泊まっていたとき、さらに六人の少女が乗りこんできた。六人とも、びっくりするほどやつれていた。おキミは自分よりも、ひもじく生きてきた人たちだ、と直感した。田舎くさが少女たちから匂った。やつれ果てて、だれも、ものもいわない。

船員を相手に仕事をして、食べものを食べて、すこし元氣になった少女たちが、たがいに名のつた。みんな百姓だといった。六人は十五歳までで、いちばん幼い子は十二だった。おキミは自分がいちばん年長なのか、と思った。

おとうさんの李慶春は十四人の娘をつれて朝鮮へむかうらしく、あとはだれも乗り込むことなく、船が出た。おショウバイは昼も夜もあって、少女たちはよく泣いた。

門司の港を離れて、玄界灘へ出ると、波が高かった。ある日、おキミは甲板に出ていた。波のむこうから一群の小鳥がかん高いさえずりをあげて、降りこぼれるように船へ舞い降りた。頭より少し高いところで、シュルシュル、チリ、チリ、チリ、と鳴いた。たがいにチリチリチリと鳴きかわした。一羽が、おキミの肩にとまった。

そしていっせいに飛びたつと、たちまち海原の奥へ消えていった。九州のほうへ。自分たちがむかうのと反対のほうへ。

のちのこと、老いたおキミがある日、渡り鳥の大群が飛来したのをみて、

「ああっ、この鳥！　うちが朝鮮に売られていくとき、玄界灘で逢うたんよ。うちの肩にとま
ったんよ」

と叫び、その夜眠らなかった。

頭に冠をかぶり、尾をピンと立てたこの鳥は季節ごとに九州の空に訪れた。わたしは綾さんと、この小鳥はなんという鳥だろう、と、鳥類図鑑でしらべた。連雀であった。

航行中に少女のひとりが危篤におちた。十二歳の子であった。船に來たときから元気がなかった。咳をし、その咳とともに血が飛んだ。山口県のどこか、海から遠くないところで、せりおとされて來た、といった。数十人いたせり場の少女のなかから六人が李慶春の手に渡ったのであった。同じせり場でせりおとされた、ほかの娘たちのゆく先は知るよしもない。

十二歳の子は息絶えた。

残された十三人はその子にとりすがって泣いた。

「あんた、よかったなあ、もうおショウバイせんでよかごとなつて。うちら、いまからおショウバイせんならん。あんた、よかったなあ……」

おキミは、みんなでこの子のおとむらいをしてやろう、といった。経を読まぬと成仏できないと思われた。しかし、だれも経を知らなかった。泣き顔をならべて相談をつづけた。だれか